

本多猗蘭侯と高野蘭亭

中 田 勇 次 郎

はじめに

かねてより本大学の史学研究所において課題としている伊勢神戸藩主本多猗蘭侯についての研究の一つとして、昭和六十二年度には、徂徠派の詩人で名を知られ、猗蘭侯とも詩文の交渉のあった高野蘭亭を取りあげることにした。それについて、高野蘭亭の寿蔵礪が鎌倉の円覚寺にあるので、それを実地調査する計画を立て、この年、十月一日から三日にかけて現地に赴いた。同行したのは、本学藤井直正教授のほか、研究室の額田助手その他参加の学生数名であった。この地は名所旧蹟も多いので、鎌倉八幡宮をはじめ、極楽寺、長谷寺、大仏のほか、美術館、宝物館等を時間の許すかぎり見学をして、周辺的环境にも触れながら調査をより効果的に進めることができた。

円覚寺を訪れたのは、十月二日で、この日はこの寺の開山国師無学祖元の開山忌にあたり、法堂のあたりに読経の音が聞えて、法衣を正した禅僧が山内を練りあるく姿も見えて、何となく荘厳な気分がただよっているのを覚えた。展墓の目的とする高野蘭亭の寿蔵礪が、広い寺域内のどこにあるかは、さいわい、このたびの調査について寺への紹介をいただいた、横浜市（中区南仲通5の6）の神奈川県立博物館の鈴木良明氏が、あらかじめその所在をたしかめて下さったので、寺門に入ってすぐに見出すことができた。その位置は、寺の表門を入れて右手に山路を上り、百数十級の石段よりなった山路を上った小高い丘の上に、大弁財天を祀る御堂があり、その向って左の側に高野蘭亭の寿蔵礪があった。弁財天の御堂のすぐ近くに鐘楼があり大きい梵鐘が懸っていた。そのかたわらの立札の言葉を借りてこの由来を見る。

「国宝大鐘弁天」、凡そ六百八十年の昔、執権北条時貞（時宗の子）七日七夜、江の島の弁天に参籠し、天下泰平万民和楽を祈り、靈夢を感

じて大鐘を鑄造(後伏見天皇、正安三年、一三〇一)、当山に奉納し、弁天堂を建て、以って之を祭り、当山の鎮守となす。以来、靈驗あらたかにして、祈願するところあれば、必ず感応を蒙る故に、賽者常に跡を絶たず、又、この境地は眺望絶佳、北鎌倉の翠巒を眼下に収め、遠く富士の霊峰を望む。堂前に立ちて清風に吹かれる時は、何人も百十三余級の石段を攀じのぼる労が報いられて余りあるを知るであらう。因に当弁財天の祭礼は十一月二十八日であるが、六十年毎の巳の年において大祭を行う。又、この梵鐘は鎌倉第一の大鐘で、常楽寺、建長寺の鐘とともに、鎌倉三名鐘の一つで、その高さ二五九・五糎、口径一四二糎ある」という。又、立札の一つに、「弁財天を祀る洪鐘鑄造のおり、江の島弁財天の加護によって円成したと伝えられることを由緒とする。六十年に一度大祭が行われる」とある。御堂はそれほど大きくはないが、正面の楣間に「大弁財天」の額が懸っている。堂の裏側に空地があり、説明にあるとおり、ここからは鎌倉の北方一帯をひろく眺望することができる。たしかに風光絶佳の地である。

高野蘭亭は、小伝によると鎌倉の山水の奇麗なのを喜び、円覚寺の傍らの丘陵に茅堂を結び、松濤館と名づけて、遊息の所とし、「吾逝かば其れ即ち此に安んぜんか」と言つて、ここに寿碣を立てたという。今、この松濤館のおもかげは見出すことはできないが、現在の寿碣のあるところは、おそらくその遺跡であることはまちがいない、この眺望の美しい地に、かつてはその松濤館があったかと思われる。このあたりは文字どおり松林の生いしげった丘陵で、松風の音は今もなお聞くことができるまことに景勝の地である。

高野蘭亭寿蔵碣

高野蘭亭の墓碣は、円石の台座の上に立てられた、いわゆる墓碣の形式によるもので、後に掲げた墓誌に馬鬣封の形をなす、とあるように円石の上部を平らかにして碑碣の身をのせた形式で、碣の本身は一一四・四糎、正面の横巾は六七・三糎、側面は三三・二糎あり、正面に大きく楷書にて「蘭亭居士之墓」とある。墓碣としては大きいものに属する。徂徠派の今まで見てきた他の儒者の墓碑に比べてずっと大きく作られている。寿蔵とよばれているとおり、在世中に立てられたもので、自らの思うままに造成されたものであらう。碣の文は下記のとおりである。文は向って左側九行、行二十九字、陰面は十九字、行二十九字、右側は五行、行二十九字ある。款記に、「宝曆甲戌冬十二月門人龜山松崎惟時撰」

とあり、宝暦四年（一七五四）十二月に建立されていることがわかる。文の後に付刻して、「先生以宝暦七年丁丑七月六日卒、年五十四、惟時又記」とあり、蘭亭は寿碣を立ててのち三年にして卒した。年五十四歳であった。惟時とあるのは松崎観海のことで、高野蘭亭の門下の人物で、さきに、徂徠派の儒者の越智雲夢の墓碑を調査したとき、東京都南麻布の天真寺において、越智雲夢と隣あわせて、松崎観海およびその父松崎白圭（観瀾）の墓碑があった。観海は高野蘭亭の門人であり、従ってこの文を撰しているわけである。（小著、本多猗蘭侯と越智雲夢参照）。名は惟時といい、字は君修、号は観海、江戸の人、安永四年、五十一歳にて卒した。亀山は藩の名。この寿碣の文は観海集に収められている。この文を書丹した人は、明記されていないのでよくわからない。松崎観海が同時に撰ならびに書とあれば観海の書とわかるが、そうではないらしい。蘭亭の自筆かどうかについては、「先哲叢談」の中に、蘭亭の詩の、人と往復するものは、いつも伊藤華岡（伊勢の人）にたのんで書かせていた。それで当時の人が華岡のことを蘭亭の書佐（代書人）とよんでいた、ということを書いてある。蘭亭は早くに失明しているので、他人に頼んで書かせていることが多いであろうから、これも誰か他の人、あるいは華岡が書いているかもしれない。高野蘭亭の門下において詩を学んだ本多壺山公の墓碑も伊藤華岡が書いているので、その書と比べてみたが、両碑は別筆のようである。

次に、高野蘭亭の墓碣の本文について記すこととする。なお今回の拓本は藤井直正教授と助手学生の手によって作成されたものであることを付記する。

東里先生壽藏記

- 1、東里先生升於圓覺寺後山曰、樂哉斯丘也、死則我欲葬焉。既寢疾終歲起
- 2、曰昇哉、夫造物者又將勞我以生乎。雖然吾生多病、今年五十一、髮如此種
- 3、種。其與幾何。乃營壽藏于其地、謂惟時、後生知我者莫子如也。子何不為我
- 4、槩次家世鄉里於石與。其待其就木、強為諛墓之辭、使人疑、夫不以情為文
- 5、者也。按譜先生本姓高石、其先下毛人、六世祖、信忠、足利氏之世、封喜連川。
- 6、後失其域邑、徙于南総、遂籍焉。至王父勝昌、遷東都乃改姓高野、廢居治産。
- 7、考勝春以善俳諧聯歌有名、號百里居士。先生生聡敏、四歲能書、六歲從佐

本多猗蘭侯と高野蘭亭

- 8、玄龍兄弟學書。既就外傳好為歌詩。有奇句。成童見物夫子。夫子奇之、目以
- 9、才抵連城。十七喪明。夫子謂之曰、學者亦多術矣。博聞多識、目力與為多焉。」(以上左側)
- 10、非子所宜也。先王四教、詩居其一、今之詩、繇古之詩也。行衢道者、不至用志
- 11、不分、乃疑於神。大雅久不作、其將在子乎。先生一意奉其教、盡絕人事、專為
- 12、詩。業益進、產益落。盡鬻其田宅、僦屋以居。物夫子之門、以詩名者、數十人、推
- 13、南郭先生主盟。而先生最為晚出。常兄事之。亡何声称藉藉。一日名與之齊。
- 14、當世言詩者、莫不倚二家門牆。而先生尤好誘進後輩、從遊如雲。王侯好詩
- 15、者、出其門、什七八、四方學士、未嘗通刺、而聞風私淑者、徧于海內。先生篇什
- 16、甚富、而尤長於五七言近體。歷代諸家、莫不淹貫、而大旨刻意滄溟。當其得
- 17、意、識者不能辨也。門人多請梓其集者、先生笑曰、人亦孰不欲榮名、顧吾見
- 18、其難為也。未嘗躊躇滿志。與其遺臭千載也、寧待他日。終弗許。先生家素富
- 19、厚。幼時雍容、與所交賢豪間長者遊。進釀飲食、被服甚美、後雖颺去乎、好蓄
- 20、古彝鼎、疊洗、書畫、諸雅翫、治齋室園庭、頗修。猶尚以少時所習也。然不近聲
- 21、妓、善飲酒不及亂。居處蕭然、持論尚正、絕無浮華之風。忼慨趨人之急、朋友
- 22、有緩急疾病死喪、必竭力營辦。不之置為解。至為倡諸友出金以賙之。退不
- 23、言功、狷介疾惡、不藏怒、不宿怨。褒貶不諱。輕薄少年、時有生平慕之後棄之、
- 24、因忌其名高、而引繩排根之者。先生性好山水、又体便登涉、常厭東都之囂、
- 25、數遊鎌倉之墟、窮討幽僻、與建長円覺諸寺上人、締方外之交。諸上人、遂謀
- 26、為築草堂於円覺寺側、名曰松濤館。有五勝之奇。作詩記之。歲時携其徒游
- 27、息焉。遂自卜宅兆、云惟時綵角時、從先生問詩、至今二十年、視如骨肉。常稱

- 28、為知己者。惟時曰、大東之詩、自門闢以來、未有若今日之盛也。若先生所」(以上碑陰)
- 29、為宏麗雄贍、可以與開天嘉隆、宗工鉅匠、參立而不作矣。豈不盛哉。文人無
- 30、行、自古患之。至先生、忠信自將、名蓋天下、而無驕氣、今搢紳大夫、猶或難之。
- 31、詩之為道、發乎情、止乎禮義。奚假他之為。物夫子之教大哉。先生名惟馨。字
- 32、子式。東里其号。又称蘭亭。宝曆甲戌冬十二月、門人龜山松崎惟時撰。先生
- 33、以宝曆七年丁丑七月六日卒。年五十四。惟時又記。
- (以上右側)

東里先生、円覚寺の後山に升つて曰く、楽しい哉、斯の丘や。死すれば則ち我、焉に葬られんと欲すと。既に疾に寝ねて、終歳、起ちて曰く、昇(異)なる哉、夫れ造物は、又、將に我を勞するに生を以つてせんとするか。然りと雖も、吾が生、多病、今年五十一、髪、此の如く種々なり、其れ與ること幾何ぞと。乃ち寿藏を其の地に営み、惟時(門人松崎觀海)に謂う。後生、我を知る者、子に如くは莫し。子、何ぞ我が為めに家世郷里を石に概次せざるや。其れ其の木に就くを待ちて、強いて誤墓の辞を為し、人をして疑わしむるは、夫れ情を以つて文を為る者なりと。譜を按ずるに、先生・本姓高石、其の先、下毛の人なり。六世の祖信忠、足利氏の世、喜連川に封ぜらる。後、其の城邑を失し、南総に徙り、遂に焉に籍す。王父(祖父)勝昌に至り、東都に遷り、乃ち姓を高野と改む。廢居(貨物を貯えておいて物價の騰貴をまつこと)、産を治む。考(父)勝春、俳諧聯歌を善くするを以つて名あり、百里居士と号す。先生、生れながらにして聡敏、四歳にして書を能くす。六歳、佐玄龍(佐々木氏)兄弟に従つて書を学ぶ。既にして外傳に就きて、好んで歌詩を為る。奇句あり。成童、物夫子(荻生徂徠)に見ゆ。夫子、之を奇とし、目するに、才、連城に抵るを以つてす。十七、明を喪う。夫子、之に謂いて曰く、学ぶ者、亦、術多し。博聞多識、目力、與に多と為す。子の宜しき所に非ざるなり。先王の四教(詩書礼楽)、詩、この一に居る。今の詩、繇、古の詩のごときなり。衢道を行く者、志を用いて分たざるに至らずんば、乃ち神に疑う。大雅、久しく作らず(李白の詩にこの句あり)、其れ將に、子に在らんが、と。先生、一意、其の教えを奉じ、尽く人事を絶ち、専ら詩を為る。業、益々進み、産、益々落つ。尽く其の田宅を鬻ぎ、屋を僦りて以つて居る。物夫子の門、詩を以つて名ある者、数十人あり。南郭先生(眼部南郭)を推して、盟に主たらしむ。而して先生、尤も晩出と為す。常

に之に兄事す。亡^{いづくもなく}何、声称藉々たり。一日、名、之と齊^{ひと}し。当世、詩を言う者、二家の門牆に倚らざるなし。而して、先生、尤も後輩を誘進す。從遊する者、雲の如し。王侯の詩を好む者、この門に出ずる、仕の七八。四方の学士、未だ嘗て刺を通ぜずして、而して風を開きて私淑する者、海内に徧^{あまね}し。先生、篇什、甚だ富めり。而して尤も五七言近体に長ず。歴代の諸家、淹貫せざるなし。而して大旨、滄溟（明の李攀龍）に刻意す。其の意を得るに當つてや、識者、弁ずる能わざるなり。門人、その集を梓せんことを請う者多し。先生、笑つて曰く、人、亦、孰^{たれ}か榮名を欲せざらん。顧^{おも}うに、我れ其の為し難きを見るのみ。未だ嘗て躊躇して志を満さず。其の臭を千載に遺^{のこ}すよりは、寧^{むじ}ろ他日を待たん、と。終に許さず。先生、富、素より富厚なり。幼時より雍容たり。交わるところ賢豪閥長なる者と遊ぶ。進醜して飲食、被服甚だ美なり。後、颺去すと雖も、好んで古彝鼎疊洗、書画、諸雅甌を蓄え、齋室園庭を治むるに頗る修す。猶尚、少時、習う所を以つてなり。然れども声妓を近づけず、善く酒を飲むも乱に及ばず、居処、蕭然として、持論、尚正し。絶えて浮華の風なし。忼慨、人の急に趨き、朋友の緩急疾病死喪する有らば、必ず力を竭して營辨し、厩^{とほし}きを以つて解と為さず。諸友に倡して金を出さしめて以つて之を賙^めむを為すに至る。退いて功を言わず、狷介にして、惡を疾^{にく}む。怒を藏^{かく}さず、怨を宿さず、褒貶、諱^いまず、輕薄の少年の、時に、生平之を慕うて後、之を棄るものあり、その名の高きを忌むに因つて、引繩排根（おしのけて排斥する）ものあり。先生、性、山水を好み、又、体、登渉に便なり。常に東都の囂を厭い、数^{しばしば}鎌倉の墟に遊ぶ。幽僻を窮討し、建長、円覚諸寺の上人とともに、方外の交わりを締^ひぶ。諸上人、遂に謀りて為めに草堂を円覚寺の側に築き、名づけて松濤館と曰う。五勝の奇あり。詩を作りて之を記す。歳時、其の徒を携^{たづ}えて焉^{こゝ}に遊息す。遂に自ら宅兆（墓所）を卜して云う。今に至つて二十年、視ること骨肉の如し。常に称して知己者と為す。惟時曰く、大東（日本の詩、門闢より以来、今日の盛んなるがとき有らず先生の為る所のごときは、宏麗雄瞻、以つて開天（開元天宝盛唐時代）嘉隆（嘉靖、隆慶の明の七子の時代）の宗工鉅匠とともに参立して作^はじざるべし。豈に盛んならずや。文人、行い無きこと、古より之を思う。先生に至つては、忠信、自ら將^{おさ}ない、名、天下を蓋つて、而も驕氣なし。今、縉紳大夫、猶或いは之を難んず。詩の道たるや、情に発して礼義に止まる、矣^{なん}ぞ他に仮ることを為さんや。物夫子の教え、大なる哉。先生、名は惟馨、字は子式、東里、その号なり。又、蘭亭と称す。宝曆甲戌冬十二月、門人龜山松崎惟時撰す。先生、宝曆七年丁丑七月六日を以つて卒す。年五十四。惟時、又記す。

この墓碣によって、高野蘭亭のあらましの伝記がわかる。その家系については、六世の祖信忠が足利氏に仕えて喜連川に封ぜられた。祖父の

勝昌のとき、江戸に移って、高野と姓を改めた。この時代に富豪となつてゐる。父の勝春は俳諧遊歌をよくし、百里居士と号した。勝春はあざな文館、号雷堂、松尾芭蕉の門下で、のち嵐雪についた。享保十二年五月十二日没、年六十二。高野蘭亭は、名は惟馨といい、字は子式といい、東里と号し、また蘭亭と号した。生れたのは宝永元年（一七〇四）で、没したのは宝暦七年（一七五七）五十四歳であり、寿藏を建てたのは宝暦四年（一七五四）五十一歳である。蘭亭は幼年のころから聡明で、六歳のとき、佐々木玄龍兄弟に書を学んでゐる。この兄弟とは佐々木玄龍（池庵、享保八年、七十四歳没）とその弟の文山（臥龍、享保二十年没）のことをいうであらう。この二人は江戸初期の唐様書家として知られ、朝鮮国の使節の来日に際しての広酬に當つたことで名高い。次に、成童で物夫子に見えたといふ。成童は十五歳で、享保三年にあたる。このころ荻生徂徠の門に入るが、蘭亭はやがて十七歳、享保五年には失明してゐる。このとき徂徠から、目がわるければ広い学問をすることはできないから、詩を専一にやることに決心することを云つて聞かされる。これより専ら詩にはげむようになる。徂徠が愛弟子に懇々と云つてきかせた温いことばが、このままに伝えられている。徂徠門で詩名のあるものが数十人あつたが、その中で服部南郭を盟主として推薦された。蘭亭は南郭の後輩で、やや後れて世に出で、南郭を兄弟子としてこれに従つたが、いくばくもたたぬうちに、蘭亭の名は高く揚つて、ついに南郭と相並ぶようになり、当時、詩のことを口にするものは、南郭と蘭亭の二家を奉ぜぬものはなかつた。蘭亭はとくに後輩の指導をよくやつたので、それについて学ぶものがきわめて多く、大名の中で漢詩を好むもののは大半は蘭亭の詩風を慕つたといふ。蘭亭はとくに五七六の近体の律絶をよくし、よく古人の作を学んで取り入れたが、とりわけ明の古文辞派の七子の中の李攀龍（滄溟）にもつばら意を注いで、その作のよいものは李の作と見分けがつかなかつた。このことはもちろん徂徠派の提倡した明の古文辞派の傾向に合するものである。門人が、蘭亭の詩集を刊行することをすすめたが、臭を十載に遺すものだとして、刊行を許さなかつたといふ。

また、本来、裕福な家に生まれたので、生活の好尚もゆたかであり、古銅器とか書画とか書齋、庭園などみな幼いころからのよい好尚を發揮したといふ。このほか文雅で清瀦な性格のことなどもくわしく記されていて、その人物を彷彿することができる。鎌倉の円覚寺に松濤館を築いたことはその佚事としてもっとも著名であるが、そのことなどもこの文でその前後の経緯がよくわかる。

東里先生墓誌銘

蘭亭には、もう一つ東里先生墓誌銘があり、壽藏碣をさらに詳しく補うことができる。その所在は明らかではないが、ここでは新編相模国風土記稿卷之十、芸文部之七から引用することとする。

東里先生墓誌銘

山惟熊

宝曆七年七月六日、東里先生高野君卒。其配市橋氏、謂惟熊曰、為先人誌石焉。熊也辭以不敏、曰、先人嘗屬後事于未亡人云々。謂誌墓、當令惟熊為之辭。子今若不為、則他日見先人乎地下、妾其謂之何。請勿辭。於是乎誌焉。先生姓高野、諱惟馨、字子式、号東里、一号蘭亭、本姓高石。其先封喜連川、世為貴族、及足利氏之衰也、失其封爵、下為農。居総之姉崎、數世徙居東都。乃改姓高野。治産積居与時逐、遂為大賈、家累巨万。考諱勝春、号百里、天資豪邁、不事家人産、晚年財漸殫焉。年幾五十、無子、妾某氏生先生。百里翁悦甚。先生生聰敏、年僅四歲、善書。翁奇之、愛已甚。不教以市井鄉里之事。六歲學書于佐玄龍兄弟。十歲讀書。成童受業徂徠物先生。先生初見奇之。目以趙璧抵連城、十七喪明。終廢百事、唯詩是耽。蓋物夫子教之使然也。比及弱冠名漸著。二十有五、喪考服闋、後復不治産。愈益耽歌詩。是以産大盡。家僅漸々引去。尺齋鄙廬以僑居。家無儋石之儲晏如。自物夫子倡古文辭、賦々作者、不可枚舉。而擅詩名於海内者、特先生与南郭服先生二人焉耳。初物夫子没後、先生以年少兄事南郭先生。及業成也、海内王侯大人、及閭巷窮鄉之士、言詩者鮮不受業於二先生之門者。而王侯學詩者、什之六七出於先生之門。先生於詩頤門、其精可知。而其諸作無不得体。最長近体。初沿唐人体。後刻意于鱗。而能得其体。先生為詩開口為句、下筆成篇。金声玉振、彗彩流潤。每出一篇、人無不称美。其教人也、諒々善誘、使其嘯煦翰墨、遊息藝苑、而後渙然氷积、怡然理順。是以人々樂遵其教、弟子益進、幾遍海内。聞風私淑者、不可勝數也。先生素好遊山川、多病不能遂其志。嘗遊相之鎌倉、曰、是一培塿、未足美觀、然霸王之墟、足以感慨矣。且距東都、百里而遠、是我輞川也。數往還。於是、建長円覚諸寺緇徒、相邀請詩者多。先生亦不拒之。遂相往來。締方外之交甚厚。諸上人相謀、營草堂於瑞鹿山側、甚有幽致。名以五勝。曰松濤館、曰薛荔門、曰蕉鹿園。曰漱玉橋、曰灌花井、賦詩以紀焉。歲一再往還以樂。故己己以後諸作、鎌倉詩居其半。先生羸弱善病、幾死復蘇者數矣。宝曆甲戌之夏、先生寢

疾病、召門弟子曰、我命在旦夕。死当葬鎌倉円覚寺之後山。我嘗登彼丘、而樂焉。二三子無違、則死日猶生日。數旬病愈、復召二三子曰、日者我將即窆窆。豈復得与二三子相見乎。既而有今日、抑天之寵靈與。亦將天欲勞使吾与。雖然五十之年、今已過。人生幾何。我將築壽藏乎彼丘以待餘年。遂遣人築墳。其崇八尺、樹以一株松。封如馬鬣。使門人松崎惟時、記其事于石。巍然在焉。今歲六月、先生復寢疾。越七月六日、病革。市橋氏遣人召松崎惟時、橫谷友信、竹川政辰、及惟熊、各奔趨而至。則卒。各為位哭。先生無子、故四子相謀、竣喪事。友信、政辰、奉櫬赴鎌倉、葬円覚寺壽藏地。先生容貌端正、舉動不苟、為人剛毅、不耽声色貨利、趨人之急、甚於己私。才辨敏捷、議論竟日、終無所屈。好飲、然未曾失其儀。是以一時王侯貴人尊重之、執弟子礼以待之。久而愈敬之。先生自幼所著詩、万有餘篇。亡慮若干卷。及疾病悉傳之火。使無子遺。於是二三子相謀、輯各營所私錄者、僅不滿千首、將伝于世。先生生於宝永元年甲申、得年五十有四、先後娶妻六人、一無所生、絶嗣。銘曰。

先生之言之文、人無以惡無以數。天未喪斯文、永世以終譽。

宝曆七年七月六日、東里先生高野君卒す。その配(妻)市橋氏、惟熊(藤山秋水)に謂いて曰く、先人の為めに石に誌せと。熊、辞するに不敏を以つてす。(夫人)曰く、先人、嘗て後事を未亡人に属して云々、謂えらく、墓に誌すこと、当に惟熊をして之が辞を為らしむべし。子今若し為らずんば、則ち他日先人地下において見えんとき、妾、其れ何にか謂うべき。請う辞するなかれと。ここにおいてか誌す。先生、姓高野、諱は惟馨、字は子式、東里と号す。一に蘭亭と号す。本姓は高石。其の先は喜連川に封ぜらる。世々貴族たり。足利氏の衰うるに及びてや、その封爵を失ひ、下りて農と為る。総の姉崎に居る。數世にして東都に徙り居る。乃ち姓を高野と改む。治産積居、時ととも逐い(史記、貨殖伝の言葉、資産を蓄積して時機を見て売買する)、遂に大賈と為る。家、巨万を累ぬ。考(父)諱は勝春、百里と号す。天資豪邁、家人の産を事とせず。晩年、財、漸く殫く。年、幾ど五十。子なし。妾某氏先生を生む。百里翁、悦ぶこと甚し。先生、生れながらにして聡敏にして、年わずかに四歳にして書を善くす。翁、之を奇とし愛することすに甚し。教うるに市井郷里の事を以つてせず。六歳にして書を佐玄龍兄弟(佐々木玄龍と文山)に学ぶ。十歳にして書を読む。成童(十五歳)業を徂徠物先生に受く。先生、初めて見るや、之を奇とし、目するに趙璧(趙の惠王の所蔵した宝玉)、連城に抵るを以つてす(秦の昭王が趙氏の璧を手に入れんとし、十五城と

代えようと言つた故事)。十七、明を喪う。終に百事を廢し、唯だ詩に是れ耽る。蓋し、物夫子の之に教えて然らしむるなり。弱冠(二十歳)に及ぶころ、名漸く著わる。二十有五、考(父)を喪い、闋に服す。後、復た産を治めず。愈々益々歌詩に耽る。是を以つて産、大いに盪す(すなくなる)。家僮も漸々引去す。尽く鄼廬を嚮ぎ以つて僑居す。家に儻石の儲なきも晏如たり。物夫子の古文辭を倡せしより、斌々(彬々)たる作者、枚挙すべからず。而して詩名を海内に擅にする者は、特先生と南郭服先生とのみ。初め、物夫子没後(享保十三年、一七二八)、先生、年少なるを以つて、南郭先生に兄事す。業、成るに及びてや、海内の王侯大人、及び閭巷窮郷の士の、詩を言うもの、業を二先生の門に受けざるもの少なし。而して、王侯の詩を学ぶもの、什の六七、先生の門に出づ。先生、詩に於て韻門(専門)たり、その精なること知るべし。而してその諸作、体を得ざるものなし。最も近体に長ず。初め、唐人の体に沿い、後、于鱗(李攀龍)に刻意す。而して能くその体を得たり。先生の詩を為るや、口を開けば句を為し、筆を下せば篇を成す。金声玉振、発彩流潤、一篇を出すごとに、人、称美せざるなし。その人を教うるや、諄々として善く誘い、其れをして翰墨を嚙煦(たのしくあたためる)、芸苑に遊息せしめ、而る後、渙然と氷積し、怡然として理順う。是を以つて人々その教に遵うを楽しみ、弟子、益々進み、幾ど海内に遍し。風を聞きて私淑する者、勝て数うべからざるなり。先生、素より好んで山川に遊び、多病にしてその志を遂ぐる能わず。嘗て相の鎌倉に遊びて曰く、是の一培塿(小高い丘)、未だ美觀となすに足らず。然れども、霸王の墟、以つて感慨するに足れり。且つ東都を距つること、百里にして遠し。是れ我が輞川(唐王維の別業)なり。数しば往還す。是に於て、建長、円覚の諸寺の緇徒、相邀えて詩を請うもの多し。先生も亦、之を拒まず。遂に相往来し、方外の交りを締ぶこと甚だ厚し。諸上人相謀りて、草堂を瑞鹿山(円覚寺)の側に營み、甚だ幽致あり。名づくるに五勝を以つてす。曰く松濤館、曰く薛荔門、曰く蕉鹿園、曰く漱玉橋、曰く灌花井、と。詩を賦して以つて紀す。歳に一再、往還して以つて楽しむ。故に、己巳以後(寛延二年、一七四九)の諸作、鎌倉の詩、その半ばに居る。先生、羸弱、善く病む。幾んど死せんとして、復た蘇ること数しばなり。宝曆甲戌の夏(四年、一七五四)、先生疾に寝ねて、病む。や、門弟子を召して曰く、我が命、旦夕に在り。死せば当に鎌倉円覚寺の後山に葬るべし。我、嘗て彼の丘に登りて楽しみ。二三子、違ふ無くんば、則ち死するの日、猶お生日のごとからんと。数句にして病愈ゆ。復た二三子を召して曰く、日に我、將に窀穸(墓壙)に即かんとす。豈凶らんや、復た二三子と相見ゆるを得たり。既にして今日あり、抑、天の寵靈か、亦將、天の吾を勞使せんと欲するか。然りと雖も、五十の年、今すでに過ぎたり。人生いくばくぞ、我、將に

寿藏を彼の丘に築いて以つて餘年を待たんとす、と。遂に人を遣して墳を築く。其の崇八尺、樹うるに一株の松を以つてす。封は馬鬣の如し。(墳墓の形式に馬鬣封というのがあり、封土の形が馬のたてがみの上部がうすくなっているのに比していう)。門人松崎惟時をしてその事を石に記さしむ。巍然として焉に在り。今歳六月、先生、復た疾に寝ぬ。越えて七月六日、病革まる。市橋氏、人を遣して松崎惟時、横谷友信、竹川政辰、及び惟熊を召す。各おの犇趨して至れば、則す卒す。各おの位を為りて哭す。先生、子なし。故に、四子相謀り、喪事を竣る。友信、政辰、櫛を奉じて鎌倉に赴き、円覚寺寿藏の地に葬る。先生、容貞端正、挙動、苟くもせず。人となり剛毅、声色貨利に耽らず。人の急に趨くこと、己私よりも甚し。才辨敏捷、議論、日を竟うも、終に届するところなし。飲を好めども、然れども未だ普てその儀を失せず。是を以つて一時の王侯貴人、之を尊重し、弟子の礼を執り、以つて之を待つ。久しくして愈々之を敬す。先生、幼より著わすところの詩、万有餘篇、亡慮若干卷、疾病に及んで悉く之を火に傳し、子遺(残り)なからしむ。是に於て二三子相謀り、各おの嘗て私録するところのものを輯むるに、僅かに、千首に満たず。將に世に伝えんとす。先生、宝永元年甲申に生れ、年を得ること五十有四。先後、妻を娶ること六人。一も生むところなく、嗣を絶す。銘に曰く。

先生の言と文と、人の以つて悪むなく、以つて駁るなし。天末だ斯文を喪さず、永世、以つて譽を終めん。

この墓誌では、前掲の寿藏碯の記事を補うことのできるものが多い。その妻が市橋氏であることはこれにてわかる。先祖のうちで、祖父の時には、大賈(商人)となつて巨万の富を有したこと、父の勝春になつて、家産を尽くすに至つたこと、父に子がなくて、妾某氏が蘭亭を生んだこと、十五歳で徂徠について学ぶ。十七歳で失明し、徂徠に教導されて詩に専念するようになり、弱冠二十歳のころに名が著われたこと、二十歳で父をうしない喪に服したが、そのちは、家業を治めず、ますます歌詩に耽るようになったこと。徂徠について、古文辞の提倡の波にのつて、当時の詩壇に名をあげ、服部南郭に従つて、ついに、両者がならんで当時の王侯をはじめ、一般の詩を学ぶ人々の間においても、尊敬を集めていたことなどがくわしく記されている。蘭亭が詩をつくると、口を開けば詩句となり、筆を下せば篇となる。この美しい詩が、一たび発表されると、誰しも称賛しないものはなかった。蘭亭は、人を教導することが丁寧で、わかりやすく説得する力があり、このために弟子の数がいよいよ多くなり、私淑するものが数えきれないほどであったという、この辺の記事は、かれの詩人としての声価のいかに高かったかを物語っている。鎌倉の別墅についても、かなりくわしい。とくにここに五つの景勝があつたというが、この文では、それを具体的に掲げて、松濤館、

薛荔門、蕉鹿園、漱玉橋、灌花井という。これを唐の詩人王維の輞川別業になぞらえて、詩に賦している。年に一二度、江戸から鎌倉へ来て、この風致を楽しんだという。己巳寛延二年（一七四九）以後の詩は、大半は鎌倉で歌ったものであるという。その没するときの状況もくわしくのべている。没する三年前に、鎌倉の丘に寿藏を作ったのは、高さが八尺、一株の松を植えたことまで記されている。今の、寿藏礪の位置はその台座の礪あたりの石組が、当初のままのような古い形を存しているので、多分、もとの位置のままであろう。没してのち、門人の四人が、あとの事にあずかったことも、くわしく記されている。ただ惜しいことは、蘭亭の詩稿は、万有余篇に及んだが、病半に自らことごとく焼きすてられたことで、友人たちが謀ってその遺稿をまとめたのは、千首に満たなかったという。今、「蘭亭先生詩文集」と「蘭亭遺稿」があるという。詩文集の方は内閣文庫に収蔵されたものがある。

蘭亭の門人としては、墓誌には、妻の実家の市橋氏が指名した上記の四人があげられている。世に蘭亭門五子としてあげられているのは、松崎観海、横谷玄圃、藤山秋水、近藤西涯、竹子徳の五人である（儒家小誌）。松崎観海、前出の寿藏礪の撰者であり、名は惟時、字は君修、号観海。松崎観瀾（家老となる）、白圭の子、江戸の人、安永四年没、五十一歳。太宰春台門、のち高野蘭亭門に入り詩を学ぶ。篠山又亀山藩儒。横谷玄圃、名は友信、字は文卿、号は玄圃、江戸の人、安永七年没、五十九歳。盲人。藤山秋水、名は惟熊、学は子祥、号秋水、霞関、江戸の人、天明六年没、五十八歳、杵築藩儒。墓誌を撰した山惟熊とあるのはこの人のこと。山は藤山姓を修している。近藤西涯、名は篤、字は子業、号は西涯、岡山の人。河口静齋門にあった人。岡山藩儒。竹子徳は、竹川政辰のこと。名は政辰、字は子徳、号は馬陵、修して竹子徳という。伊勢の人。文化二年没、六十二歳。この五子の中、近藤西涯は蘭亭門かどうか疑わしい。この人よりも、唐橋君山、名は世済、字は美卿、号は君山、江戸の人。寛政十二年没、六十五歳、豊後岡藩儒、蘭亭に詩文を学んでいる。従って、市橋氏の指名した四子、すなわち松崎、横谷、竹川、藤山のほかに唐橋君山を加えて五子とよぶべきであろう。また、このほかに、稲垣白崑がある。名は長章、字は釋明、号は白崑、越前の人、大野藩儒。太宰春台門下で、又詩を蘭亭に学んでいる。安永六年没、八十三歳。あるいはこの人も、数に入るかもしれない。

また蘭亭先生詩集巻九に病中寄五子と題して、松崎観海、藤山秋水、横谷玄圃、竹川政辰、釈禪軾の五人を掲げている。この釈禪軾は蘭亭先生詩集の編集にもあずかった人で、はじめ松崎観海の門に入り、ついで高野蘭亭についても学び、蘭亭先生詩集の跋をも書いているから、五子としては、蘭亭自身の指名によるところのこの五子を指すのがもっとも近いであろう。

高野蘭亭の佚事

高野蘭亭の佚事については、先哲叢談にまとめられている。いくつかの佚事があり、多少は、上記にもふれたが、主なものは、妻を選ぶとき、姿色のまさるものと才徳のあるものといずれを選ぶかということで、ある人から、才徳のすぐれたものを選ぶのがよい、姿色はその次ぎであることを教えられた。しかし、結局は、姿色のすぐれたものを選んだので、かれは六たび妻を娶ったが、ついに後嗣の子ができなかったという。

もう一つは、蘭亭は酒をこのみ、変ったことが好きで、つねに觴醜杯を挙げて飲んでいた。友人の秋山玉山が、かれのために觴醜杯行の歌を作った。その序のことばに、

高子式山人は達士なり、觴醜杯を置いて、時々把玩す。死生を一にし、形骸を忘れ、超然自適す。少年輩、争い飲んで豪拳とす。予独り、しやく燈^あ類して飲むこと能わず、衆、余が未達を笑う。因って觴醜杯行を作りて自ら嘲り、兼ねて觴醜の為に嘲りを解く、詩に曰く、

「既非月支頭、亦無知伯仇、山人好奇奇至骨、日盛美酒以觴醜、少年争飲誇豪拳、皆道山人達士流」云々（以下略）とある。

なお、高野蘭亭の小伝は、「近世叢話」、「先哲叢談」、「事実文編」などに見える。

猗蘭侯と高野蘭亭

本多猗蘭侯と高野蘭亭との接触はどのようであったか。猗蘭侯（一六九一—一七五七）と高野蘭亭（一七〇四—一七五七）は、猗蘭侯の方が十四歳年長であり、没年は同じく宝暦七年である。蘭亭は成童（十五歳）で徂徠の門に入る。享保三年のころである。猗蘭侯はそれよりさき、宝永六年（一七〇九）徂徠の護園塾の成ったところから、おそくとも正徳元年（一七一一）のころまでには、徂徠に入門していると考えられる。

服部南郭（一六八三—一七五九）もおそらく護園塾の成ったころには、相前後して徂徠門に入っている。従って、蘭亭の徂徠塾に入った成童のころ、享保三年のころには、もう古文辞派の動きがようやく鮮明になりつつあるときである。護園派の人々の社集が享保年間になると、頻繁に行われている。正徳のはじめ（一七一—）から、享保十七年、猗蘭台集の初集の成ったころまでには、さかんに護園の社集が行われているときである。その間、詩会での唱酬の作については、すでに本論集の番号にわたって論じてきたとおりである。この社集はさらに徂徠の没後（享保十三年）から、猗蘭侯の晩年にまでつづくが、次第に親密な交友たちの分散や物故によって、猗蘭侯の晩年には、南郭のほか少数のものが加わる程度になっている。この間、蘭亭の参加したのは、猗蘭台集では、わずかに、三稿卷二（21頁）に次の詩が載っているだけである。

雨中子遷子式烏石集桂花樓得寒字

今雨雷君欲罄飲、莫如但使对尊蘭、山遥煙霧九天暗、江近杯盤五月寒、長夏樓中開筆硯、一時壁上掛衣冠、為緣琴酒迎嵒阮、聊作風流林下看、

右の七律一首、この社集に出席したのは、子遷（南郭）、子式（蘭亭）、烏石（松下烏石）で、会場は桂花樓である。桂花樓は、猗蘭侯が保養のために、海に面した松林のある土地を開いて設けた別墅で、ここではしばしば詩会が催された。猗蘭台集の二稿三稿や南郭の文集の三篇にここで作った多数の作がのっている。みな詩の社集のあったときの作である。猗蘭台集の三稿はほぼ享保二十年（一七三五）から寛延三年（一七五〇）までのころの作を収めている。この作もちょうどこの間のものとすべきであろう。従ってこの詩の示すとおり、南郭や烏石と同席した詩の会に蘭亭の参加している例があったことになり、猗蘭侯との接触のあったことが、はっきりと証明される作である。折からの雷雨の夕立のあった席で、酒をくみ詩をつくり、晋人の風流のように楽しい詩酒の会合のさまをえがいた作である。猗蘭侯は酒をよく楽しみ、南郭もよく陶酔した、蘭亭も酒は好むところで、乱に及ばずと言われているが、宴席では楽しい酒であったであろう。この作のほかに、猗蘭台集は、蘭亭の名はまだ見出すことができない。しかし、蘭亭は、どの程度かわからないが早く十七歳のときから失明しているので、それほど頻繁には出席してはいなかったことも考えられる。又、年齢から言っても、かなりの後輩であったことも考慮してよいであろう。ただ、平生の作は、万首に及ぶというから、たえず詠草はあつたはずで、全詩の伝わらないことが惜しまれる。

服部南郭との唱酬

服部南郭の南郭先生文集から、蘭亭の關係作を拾ってみると次のとおりである。初編に、高秀才また高生とある詩が散見するが、高野蘭亭かどうか確かには定められない。

答高子式秋日見寄二首高前遭失恃之變、

二編卷四

登樓深愧仲宣才、驚我真成華髮催、且对江流嗟遊者、堪迎楚色賦悲哉、交遊情動浮雲散、搖落秋傷老樹摧、因憶荳洲萱草晚、劬勞今日為君哀

何処凄風落碧梧、誰憐夜月对君孤、失明發憤春秋傳、忘外探玄象罔珠、抱病不妨耽翰墨、卜居寧更問江湖、詩成時有山河感、寄到黃公旧酒徒、

この詩は蘭亭が失明した哀しみに答えてそれを慰勞する意をこめて歌っている。

答高子式見寄

二編卷四

詞容趨陪翰墨林、喪明寧廢據梧吟、西河夫子名応盛、南郭先生隱轉深、何足詩篇酬錦字、但將閑事寓灰心、好来猶欲聽天籟、萬木秋高赤羽陰、これも蘭亭の失明のことを歌っている。赤羽とあるのは南郭の住居である。

小集子式不至、有詩見寄懷、因和却寄

二編卷四

誰家命駕鳳城東、此處故人聊復同、千里只言思叔夜、一時無那少車公、停杯旅食慙南館、携手長歌望北風、間説近來多賦雪、何如授簡吹臺工、

詩社の集會に蘭亭が出席しないで、詩を作つてよこしたので、その詩に次韻をして答えた作。千里、只だ言に叔夜を思う、一時、車公を少(欠)くをいかんとするなしとあり、叔夜は晋の文人嵇康、車公は晋の車胤のこと。車胤は宴席の司会、かうまく、この人が出席しないと宴會が楽しくならないという故事があるのによつて、叔夜、車公ともに蘭亭に見立ててこの出席しなかつたことを惜しんでいる。蘭

本多猗蘭侯と高野蘭亭

亭が南郭について詩社に出席していたころの情況がよくわかる。鳳城は皇城であろう。その東と言えば或は猗蘭侯の邸か。

高子式萱洲宅成二首

三編卷三

聊下幽居試賦才、采芳洲渚與悠哉、纓塵旧濯滄浪水、籬菊新含濁酒杯、園霧江帆侵樹入、檻雲城櫟對樓廻、不須襟背栽萱草、日載忘憂與客開、誰言車馬混風塵、此地牆東溝水浜、心遠江湖寧擇境、隱深朝市不違親、秋風試釣鱸魚大、曉樹移巢鳥雀新、已見貴遊多轍跡、莫將熏灼駭鄉隣、蘭亭の邸宅が完成したときの作。萱洲は萱場町（かやはちょう）をいう。このあたりに蘭亭が邸宅を作ったのであろう。秋山玉山に、過（飲）高子式七律があり萱洲の語を使っている。萱洲ともいう。

子式見訪時庭花已残、分得花字

三編卷四

残尊未尽夕陽斜、蕭索閑庭一樹花、亦識恨君相問晚、誰憐春色在貧家、

南郭のところへ蘭亭が訪ねてきたが、おりから庭園の花はすでに散っていた。その席で分韻をして花の字を得て、これを韻として作る。蘭亭が南郭の家を訪れたが、春の花がすでに散ってしまったがまだ一樹さきのこっているのを賞美して作ったもの。

秋日哭高子式

四編卷一

斯人歸九原、弟子失攀援、多病促中歲、遺詩餘萬言。鄴才傷化壤、楚賦共招魂、流水終同逝、高山誰與論。遙思星月影、寧照夜臺昏、地下從來隔、天隅何處存、形神留片石、艸木託荒村、悲此秋風裏、難尋鷄絮痕、

これは宝曆七年七月六日、高野蘭亭が没した直後の哀哭の詩である。この人があの世へ行ってしまった、弟子たちは、よりどころをなくしてしまった。病気がちで、中年の命をちぢめてしまった。あとには多くの詩が残されている。すぐれた才能は土となってしまい、よい作品は水の流れとともに消え去った。もはや共に詩を論ずることもできず、はるかに月や星の影を仰ぎ見るばかりである云々という。

高野蘭亭の詩

高野蘭亭の詩は、蘭亭先生詩集に収められている。この詩集ははじめに上記の寿蔵碣を撰文した松崎惟時の序文があり、蘭亭の詩を服部南郭

に比較して、我が邦に於て生民より以来、未だ二公のごとき有らざるなりと激称している。また、この詩集の編集に当っては、門人の秋山惟熊、竹川政辰、横谷友信、釈禅軾が共同編集したことを記している。松崎惟時観瀾の序文は、東都源師道（龍岡）が代書している。つぎにまた、本多壺山公の序文がある。壺山公は前号（本学論集第十九号）にも調査の結果を紹介したとおりで、公は高野蘭亭に詩を学んでいる。この関係から、詩集に序文を書いているのであろう。題蘭亭先生詩篇として七言長篇の詩一首を墨書のまま刻している。「白髮蒼洲老處士（蘭亭先生をいう）、可称大隠々朝市、一区之宅枕潮流、此地曾嘗明月楼、明月一片湧波際、明珠一握照牀頭、（中略）豈翅竹帛勒功名、遺草千秋垂不朽」とあり、睿麓陳人膝忠如と署名している。壺山公の墨書によりその筆蹟を知ることができるのは得がたい。さて、詩集は十卷あり、卷之一五言古詩、卷之二七言古詩、卷之三、卷之四、五言律詩、卷之五、卷之六、卷之七、卷之八、七言律詩、卷之九、卷之十、七言絶句、六言律詩、六言絶句に分類して収められている。七言律詩が得意であったと言われているようにその数ももっとも多い。内容は、徂徠派の詩人たちとの倡酬がきわめて多く、それらの交遊のあとを詳しくうかがうことができるのは興味深い。今ここに詳述するゆとりがないので省略するが、本多猗蘭侯に寄せた詩が一首あるのでここに掲げる。あわせて蘭亭の詩三首を付加する。

奉賀猗蘭侯五十初度

賜第城西弘紫氛、蘭台佳氣正氤氳、天通北極三台座、雲動南山五色文、玉管声兼周樂起、金茎露自漢宮分、鹿鳴今日嘉賓会、千載称觴報使君、

猗蘭侯五十歳の誕生日の集会の席での祝意を述べた作で、元文五年（一七四〇）六月十八日に当る。蘭亭は三十七歳のときの作である。

松濤館

石壁斜廻一草堂、據梧長嘯坐相忘、溪流欲轉颺颺徑、嶽色高懸薜荔牆、後圃種瓜生綠蔓、前庭移樹著春芳、若容更比山中相、風起松濤類華陽

円覚寺後山の松濤館を歌った晩年の作であり、その景観や周辺がよく描かれている。

建長寺玉雲精舎留別諸上人

老去人間跡未休、禪関握手暫相留、題詩欲別嵩山曙、負笈重期給苑秋、長向風塵何処住、可知天地此生浮、卜居儻寄招提境、問法時銷万劫

本多猗蘭侯と高野蘭亭

愁、

鎌倉にあって禪寺の諸上人と交遊した状況がこの詩によってもよくわかる。

東慶寺

女僧精舎玉為蓮、香火常供繡仏前、深鎖空門秋色静、満林紅樹有誰憐

これは鎌倉の東慶寺を歌った婉美な作。これも晩年のものである。

おわりに

高野蘭亭と猗蘭侯との間には、直接の交渉のあった資料は少ないが、同じく徂徠の門人であり、服部南郭と親密であったことにおいて、資料は少くともその関連はけっして薄いとは言えない。今回の調査では主として蘭亭の壮麗な寿蔵礪を見て、さらにそれを拓本にとることが主題であり、一応その目的は果すことができた。この拓本は本学生の大学祭のクラブ活動の一端としても陳列されたもので、一見して驚くばかりの壮麗な作である。

付記

今回この調査について、多大の便宜をはかり調査に参加して下さいった神奈川県立博物館の鈴木良明氏に厚く感謝を表す。なお、本学史学研究所の事業の一つとして調査を進め、昭和五十七年以来、六回にわたって本学論集に研究報告を掲載してきた本多猗蘭侯と徂徠派の人々についての研究論文は、本号をもって一応完結することとする。この間、この研究に対して、援助をいただいた大学当局、並びに御協力をいただいた内外の諸先生並びに研究室の諸士に厚く感謝の意を表す。昭和六十二年十一月誌。再記、今年九月末十月初旬にかけて本多侯の旧封の地、河内長野の延命寺、地藏寺等を調査する機会を得た。地藏寺では本多侯の真蹟遊九華山記一巻を拝観した。この調査については、あらためて報告することができればと思っている。